

弓道から学んだこと

中部中・3 富田 琳子

「ああ、あの子の弓の引き方きれいだな。」

私にはそんな視点はなかった。

最近、人と話すのが少し億劫になってしまった。私は元々人と関わるのが苦手だった。でも中学生になった私は、弓道部に入り素敵な仲間と出会うことができた。少しは成長していると思っていたのに、と少し落ち込む。

個人競技だと思われがちな弓道、実はそんなこともなくチームプレイだったりする。中学生は三人のチームで大会に挑む。私も中学二年生の時に、同じ年の二人とチームを組んだ。

その二人は、何事にも本気で取り組むことのできる二人だった。はじめの頃は私も、あの二人も、特別おしゃべりでも、特別人見知りでもなかったけどなかなか打ち解けることができずにいた。

そんな中、弓道部の二年生女子数人で市内にある弓道場へ自主練習に行った。大会が近づいたからだ。私達しかない弓道場では、いつも教えてもらっている先生はいないので、なぜ的に中ることができないのか聞いたり、教え合ったりすることが必要だった。思っているよりもこれが難しく、自分もなんで中らないのか分からなかった。でもなにも分からなくて逆に楽しかった。中るというのも弓道でいう的に命中させるという意味で、そういう知らない言葉などもある。それも含めて楽しかった。皆で悩んで、考えて、試行錯誤する時間は誰も正解を知らないから何も考えず意見を出し合うことができた。それに弓道場の中にあつた弓道本の中から探してみた時は宝探しみたいで皆でわくわくしていた。そんな時間が必要だったんだと今になって思う。練習も終わりの時間に近づいてきた時、

「私、全国大会出場を目ざすわ。」

とチームの一人の子が言った。思わず吹き出して笑ってしまった。

「え、いいねそれ。」

もう一人のチームの子が言う。とんでもなく大きい目標でびっくりしたけど、私も

「いいじゃん。皆で頑張ろ。」

と返事をした。今まで大きな目標を作ることがなかったからすごく面白そうで、わくわくした。その日から私達三人は、意見を言い合ったり、悩みを相談したり、時々ふざけたりすることが増え、弓道が上達するだけでなく、一緒に高め合えるチームになることができた。

私は中学二年生になって秋頃、初めての後輩ができた。二年生の私達が先輩となつて教えていた。

「もうちょつと前を狙つてみて、そしたら中ると思うよ。」

「はい。ありがとうございます。」

少し緊張しながらアドバイスをしてみると、ちゃんと返事をしてくれる後輩。初めの頃はそんなちょつとしたことでも、

「えー、先輩みたいじゃん。」

と同じ二年生の子ときやつきやと喜んでいた。私達みたいに弓道に興味をもつて、弓道部に入ってきてくれたんだから、少しでも役に立ちたいと思っていた。いや、本音はカッコいい先輩と思われたかったから人と話すのが苦手でも自分のできる最大限のアドバイスをしようと思った。

後輩達が弓を引くの慣れてきた頃、私には一つ悩みができていた。後輩にアドバイスをしても的に中らないことだった。弓道は慣れてくると自分の癖が出てくる。いかに正しい姿勢で弓を引き、的に中てることができるかを競う弓道には、癖ができてしまうと中りが減ってしまう。だが、先輩としてアドバイスをするとなると難しいのだ。私は先輩と言つても一年早く弓道を始めただけだから先生

やコーチのように正しいアドバイスをすることができないし、もし間違ったことを教えてこの子の射形が崩れてしまったら、的に中らなくなつて弓道を辞めてしまったら、と考えなくていいことまでうじうじ考えてしまつて話しかけるのが億劫になつてしまった。

そんな不安を抱えながら部活をしていたある日、いつも通り弓を引いたり、後輩の射形を見ていて気になったところがあった。思い切つて声をかけてみる。

「もう少しお腹に力を入れてみて。重心をしつかりすることで弓が引きやすくなるかも。頑張つて。違つたらごめんね。」

まったく頼りにならないような自分の言い回しに嫌気が差す。本当に情けない。その子がうなずき矢を放つ。的には中らない。もう自信がなくなつてしまった。その子に中途半端な口出しだけして戻つてきてしまった。なにも分からなかった。

ふと自分が弓道を始めたての頃を思い出して、はつとした。私は先輩として後輩のためになんでもかんでも教えなければならぬと知らない間に思い込んでしまつていた。けれど、あの頃、何もわかんないことは私にとつて、わくわくすることだった。分からないことを友達と調べたりするのは楽しいことだった。分からないことをそんなことを思い出しながら他の子の射を眺めていると、同じ二年生の子と同じ後輩を見ていることに気づいた。私は

「なんで中らないか、分からんよね。」

と話しかけた。すると、

「え？ああ、あの子の弓の引き方きれいだなって見てたんだ。私も頑張らなくちゃだね。」

と笑つていた。

衝撃的だった。そうだ、私もいつも物事を悪いようにとらえてしまふ。中らないこと、そもそもなんでもかもしらないことを悪いことだと決めつけてしまつていたことに気づいた。だから私は何かを続けることが苦手だったのか、と妙に納得してしまつたし、こ

のままでこんな好きな弓道を辞めてしまふんじゃないか、と絶望してしまつた。素敵な仲間と打ち解けるきっかけとなつた弓道を自分の悪い癖のせいで嫌いになりたくなかつた。

それから、私はアドバイスと一緒に相手のよいところも言うようになった。保険かけてる、とかお世辞だとか思われても関係なく、自分が思った、よいと感じたところを本人に伝えるようにした。そうすると自然に相手のよいところがしつかり見えるようになるから楽になつた。それに、アドバイスをした後輩の表情が心なしか前より明るく見えて嬉しかった。

私は、相手の悪いところだけではなく、よいところにもちゃんと目を向けることで、自分が逃げずに立ち向かえるようになるということと、それを伝えるのも自分と相手の気分を明るくできるんだというのを弓道から学ぶことができた。これからも私は、弓道を通していろいろなことを学びたいと思う。